青梅市文化財ニュース　第　１５　号

昭和６３年１２月　１日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

（青梅市駒木町 1-684 ℡0428-23-6859）

青梅市内の昔の天気予報

日本で初めて天気予報が発表されたのは、明治 17 年（1884）６月からです。

内務省地理局に雇われたドイツ人、Ｅ・クニッピングによってです。彼は前年２月に天気図も作成しています（Ｅ・クニッピング・“日本滞在記”）

科学的な天気予報が開始される前、日本各地ではその土地の永年の生活体験に基づいた予知の方法がとられていました。

青梅市教育委員会が昭和 56 年３月に発刊した『青梅市の自然Ｉ』に市内在住の古老の方々から聴取したことがまとめられています。その中からいくつかをとり出してみましょう。

〇朝焼けは天気が悪くなり、夕焼けは天気が良い（二俣尾）

〇日がさ、月がさがかかると雨が降る（柚木）

〇二十四時の雲（にじゅうしときのくも）が出ると雨が降る（畑中）

　＊二十四時の雲とは、いわし雲のこと

〇大岳山に雲がかかると雨か嵐になる（河辺）

〇霧があがると雨が降り、さがると天気が良くなる（小曽木）

〇沢ガニがおかにあがると、大雨が降る（富岡）

〇アリマチ（アリの行列）があると雨が降る（成木）

など、夏の雨に関する内容が多いようです。多くの項目は、市内共通に見られますが、中には山の方だけ平地の方だけというものもあります。雨に関することが多いことから、農作物の収穫に雨の多少が直接に影響するためと推察されます。

〇ハチが木の枝の下の方に巣をつくっていると台風が多い（新町）

〇雪が降っていつまでも木の枝に積もっているようだと、近いうちに又降る（畑中）

青梅は台風や雪による災害が少なかったのでしょうか、予知する項目も少ないです。あるいは、今ほど山にも植林にも多くはなく、関心が低かったのかもしれません

なお、『青梅市の自然Ｉ』は郷土博物館で１部 5000 円で入手できます。市内各地の天候差や、井戸水の一年間の水温変化、青梅市の災害史などが記載されています。

天気予知に関することをご存知の方は、どうぞご教示下さい。

（文責　川鍋幸三郎）